

お元気ですか、村松先生。

長友 和彦

8年ほど前だったろうか。まだ私の隣の研究室にいらした平田先生に、もの静かで威風のある NHK の一人の紳士を紹介された。私は緊張して挨拶を交わすのが精一杯だった。その1～2年後、その紳士が平田先生に代わり、隣の研究室の住人になられた。緊張が続いた。研究室に明かりがついていると分かれると、私は襟を正し、正姿勢でその前を歩いて、私の研究室に入った。

緊張している私に、その村松先生はいつも優しく、低姿勢で話しかけてくださった。いつも「私には学問的専門知識がないものですから……」とおっしゃりながら、「コミュニケーション・ストラテジー研究は現在どうなってるのでしょうか？」というような極めて専門的な質問をしばしば投げかけてこられた。お茶大にいらしてからの村松先生は、たいへんな勢いで新しい知識を吸収しながら、新旧のご経験に活かしたご自分なりのコミュニケーション理論を見事に展開されていた。そのことを重々承知していた私は、先生の質問に必死に答えながら、薄識な私の正体がばれないかとヒヤヒヤしていた。

その後しばらくして、留学生センター構想が持ち上がった。難しい選択だったが、私たちは日本語教育・日本語教員養成の新たな展開を夢見て、センター構想を練りあげた。しかし、一握りの大学上層部の画策によって、その構想とその構想を確認し合った念書は有名無実と化し、私たちのセンター構想は瓦解し、仁義とともに地に落ちた。その時、私に残ったのは怨念とお茶大を去る決意だけだった。

しかし、村松先生は必死に踏みとどまり、逆境の中での一步を踏み出された。寛容さと柔軟さを欠いた私を怒鳴って諭されたこともあった。センター設置に関わる重要な会議の場で、学長を怒鳴られたこともあった。それは、学長が曲解した私の発言をかばってのことだった。その迫力はすごいもので、今でも有り難く、はっきりと記憶に留めてある。

留学生センターを実質担ってこられた過程で、何度か分かれ道の岐路にお立ちになったのではないと思う。そして、ある日、その分かれ道のいくつかが先生の目と心に鮮明に映し出されたのではないと思う。今、先生はその道を明るく元気に奥様・お子様とともに闊歩なさっているのではないか……勝手にそんな想像をしながら、私も今、妻・子供、そして母と騒々しい毎日を送っている。